

1948年福井地震の際の大和百貨店の中の人間行動に関する資料（つづき）

『あのとき、大和百貨店六階で』

鯖江市 木村マサ子（談）

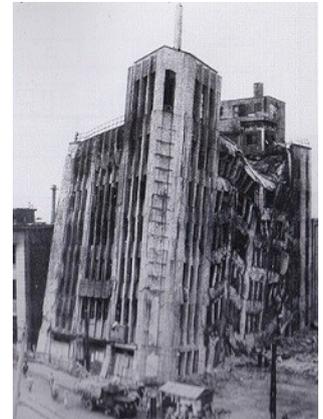
大和の店は昭和20年7月19日の福井大空襲で焼けましたが、戦災後一階二階だけ改装して開いていました。三階以上は改装中でした。一階が食料品、家庭用品、たばこ売場などで、二階が雑貨などでした。当日（昭和23年6月28日）は、5時の閉店後、従業員組合の総会が開かれることになり、5時15分前に店を閉め、一階でやるか六階でやるか意見がわかれましたが、会場の設備からいまして六階がよかろうというので、六階の食堂の方へみなが集まっていました。当時120名程従業員がおりましたが、60名ぐらいかと思いますが、集まっていました。人事や計理関係の人達は組合にあまり協力的ではありませんでしたからね。

私は組合の委員をしていましたので、後期の委員の選出ということで、用紙を配って座につくのと同時でしたね。はげしく上下に揺れて、それから合いなく左右に揺れまして、横倒しになったままどうしようもありませんでした。テーブルを細長く並べて相向かいに坐っており、議長さんはエレベーターに近い方、私は表側の方に席をとっていました。揺れたあと、エレベーター側にいた人達は案外楽に逃げられたように今から思いますが、表側にいればいるほど、まんなが落ちこんで凹みができ、この写真のように引きづられたわけですね。その中へ、落ちこむようになりました。しかし、さいわいに死者は出なかったと聞いています。ケガは全員したようでした。

テーブルがありましたんで、グラグラときて倒れた時、テーブルの脚にしがみついたのは覚えています。あのおりの揺れ方でございまして、表がえる裏がえるドンテン返しのありさまで、本当に生きた心地ませんでした。そのうち、天井のコンクリートの塊りがどんどん降ってきます。食堂でございまして、カウンターが倒れる、上のシャンデリヤが落ちてくる。生まあたたかいものがハッーと、胸やら口やら、それはみな血だったと思うんですが、思う間もありませんでした。ウァーッとした埃やら白煙り、その中で咽喉はやられますわ、ころぶ一方で、さわるものがぜんぜんないんです。テーブルの脚につかまっていたんですが、それがいつの間にか離れてしまっていました。仲のよかった松木さんっていらっしゃいましたんですけど、「松木さーん」と呼んだように思いますけど、言葉になりませんでした。どなたがどうなったやら、わかりませんでした。その間に、ずーっと頭から穴ぐらへ落ちこむような気配を受けました。それが、ちょうどこのまんなが沈下した時じゃなかったかと思います。

天井と、もちろん足元もグラグラでした。これは四階あたりから崩れていますね。四階の天井が下まで落ちているんです。結局、この凹みの中へ全部が落ちこんだんですね、つかがる（原文のまま）ものもなければ、揺れるにまかせ、あえぐにあえいで、ずるずると滑りこむように落ちていきました。

塊りがものすごい痛いんですね。五センチぐらいの厚みでしょうか、頭はもちろん肩といわずどこもかしこにも落ちてきました。避難するところがありませんでしたから、あたるにまかせる揺れるにまかせるでした。そうしているうちに、もーっと煙が立ちこめた中に、かすかに明かりが見えたので、そこへたどりつこうと思



曲がった大和ビル(福井市)



破壊された大和百貨店の屋上

まして、必死になって出たところがちょうど調理場でした。この東側のこのあたりでした。そのときには、もうすでに7、8名の方が調理場にうずくまっていたように思います。だれがどなたかわかりません。安全な場所に出られたというよろこびで「あーっ」という気持ちとともかく逃げなあかんという気持ちとでね。ほいたところが、みんな非常口に殺到したわけです。みんな頭も顔もまっしろになって、この世の人とも思われませんでした。

「ヌノムラさん」とかおたがいに名前だけ行って抱きあってよろこびましたが、ともかく「逃げんといかん」「逃げよう」といって、当時私は中川という姓でしたから「中ちゃん、どうしたらいい」っていうもんで、「非常階段へいこう」と私が先頭になっていこうとしましたが、すでに落ちてきたものやら崩れたもの、それに軋みでぜんぜん扉があきません。どうしたらよいかわからず、窓際にきて「たすけてー、助けてー」と叫ぶだけでした。よわったな、なんとかして逃げんといかんと思いました。

非常階段はがっちりそのまま残っていました。調理場からここまで、なにか渡すものが必要でした。なかには勇気のある男の人たちが二、三人、となりにあった酒伊(酒井?)ビル、それは無きずでしたから、その屋上へとびおりました。そして「待っている」と、ロープを持ってきてそのロープで、食堂の煙突が弓なりになっていたんですが、それにひっかけて煙突をひきたおして、非常階段の方へかけました。いちばん最初に渡ったのは、男の方でした。女は、六階から地上までなにもないんでしょう、足がすくんで動けません。煙突には、掃除のために足をかける把手がついていましたね。そのため渡りやすかったんです。男の方は勇気のある方はどんどん逃げるけど、女の人はみんなちゅうちょして、下を見ると高さが高いし、こわいんで、それでもだんだん逃げました。私は委員をしているという自分の責任を感じて先にみなさんを逃がしてと思って「こっちへまわりなさい」「あしなさい」と誘導しました。そして、さいごに私が逃げようとして柱につかまりましたところ、柱といってもコンクリートの部分は崩れおちてしまっていて、鉄筋が何本かかたまってあるというものでした。その間に指がはさまってしまいました。



大和百貨店東側面の圧壊箇所。写真左手には南側のコア部分が写っており、右手手前には隣接する酒井ビルがほぼ接している。圧壊した6階位置には倒壊した煙突が写っている。(註)この写真は本文にはなく、他の資料から引用したものである。

今でも、この二本の指がすこし寄っています。余震が絶えないでしょう。グラ・グラと飴みたいに曲がり、そのたんびにこの手がひきずられて、どうしようもこうしようもないんですね。…さあ、よわったな。指がとれん…あとを見ると、男の人が二人のこっていました。下をみると、西野支配人は当時金沢から通っていたんですが、駅で地震にあわれて、もどってこられたんですね。まだ六階に人がいるというので、早く逃げろと手をふっておられるのが見えるんです。後ろにいた田中さんが「中川さんの指がはさまって、とれんのか」と叫び、私は痛みで気が遠くなりそうでしたし「指、切って！」って叫んだんです。切るものなにもごさいませんし、「中ちゃん、なんとかしてとれんか」って、ここを押さえてくれる、指をもってくれるけど、だんだん、だんだん、きしむ一方ですが。…さあ、よわった。「ここで自分は犠牲になるのかな」と思いました。しかし、そのときに、「おちつけ！おちつかないかん！」という、なにか声がしたように思うんです。

ちょうどそのころ、私の母が、松岡の五領ヶ島で子どもを二人たすけて死んだ時刻やろうと思うんです。死んだことは知りませんでしたけど、その霊がよびかけたんでなかりうかと自分で思うんです。それで、自分で気を取りなおして、ともかく揺れるのを見ていると、しょっちゅうではありません。揺れる時間がありますんで、その飴のように曲がった鉄筋の揺れるぐあいを見てひけば、なんとかとれるのではないかと思って、ともかく“おちつけ”と自分にいきかせて、揺れるのをじっと見ていると、一本が少し弓なりになったと思ったので、「田中さん、今や、ひっばってー」と叫ぶのといっしょに、田中さんがぐっーとひっばってくれたんです。やれ

一っと思ったら、こんな大きな塊りが頭の真上に落ちてきました。パーっと血がとびちりました。ぬぐう間もありません。手の出血もひどいんです。これはよわった、手の出血を止めんといかんと思ひまして、ブラウスの袖をひきちぎって、応急処置として手首をぐるぐるまきにして血止めをしました。

さあ今度は、最後にそこをわたろうと思うんですが、片方の手は痛いを通りこしてしびれていて、なんとかして片方だと思うんですが、すすみませんのですね。「中ちゃん、ガンバレ！」という声にはげまされて、ほれこそ一步一步、ここから下へ落ちててもここまできたんやと思ひましてね。ああ、そのときには父や母の顔が思い浮かびましたね。一たすけて！たすけてほしい！—と思ひました。死んでいるとは知りませんでした。ようよう非常階段まで出ました。逃げたのもさいごでした。みなさんは足羽川原の方へ避難されたんでしょうかね、下にはまばらにしか人がいませんでした。ちょうど下に降りましたら、保安係の人が「中ちゃん、やられたか」「腕をやられた」といったようなやりとりをしたように思ひます。「ともかく血止めをしっかりとっておきなさいよ」「救急箱もどこへいったかわからん。中ちゃんガンバレや」とはげまされてね。

ほん前が佐佳枝劇場でしたが、劇団の座長さんが、老人でしたが、泣きながら私にすがりつきまして、「この下に座員がいる、たすけてください」というんですが、どうしようこうしようもなかったんです。ほれから、手はいたむし、支配人らも県庁の方へいけば手当してもらえはすだからというので、常脇八重ちゃんという子と二人でいきました。その道中、姿は見えないのやけど、「たすけてくれ！たすけてくれ！」という声があるんです。どこでするんか、わかりません。姿さえ見えればたすけてあげたいんですけど。「あなた、たすけて！この下や、ここや」というんですけど、もうもうとした砂煙りの中で、なにがどうなってどこにいるのやらさっぱりわかりませんでした。「どこ、どこに」ときくんですけど、「ここや、足だけ引っかかって。たすけて—」という声やら、今もう断末魔で息がたえだえの声もしました。なさないことには、こっちの手はいうことをききませんのしょう。姿さえ見えるのならどんなこととしてでもすくってあげたい気持ちがあったんですけど、それもできませんで、涙がほろほろでました。そしてようやく県庁までたどりついたんですけど、おおぜいの方がいっぱいですし、私以上にひどい傷の方がおおございましたね、こんな傷ぐらい軽い方や、重い人の方を先にやってもらわにゃいかん、「あなた、先いきなさい」といって、結局私はちょっと消毒してもらっただけですけどね、それで家へかえたのはだいぶおそうございました。火の手は、大和にいるところに白いものがまっすぐに上がっていました。新橋のちょっと手前のたべもん屋さんとか、ききましたね。大和自体は、あとで燃えました。あたりが火になって、燃え移ったんですね。調理場には火の気がありませんでした。

私の家は観音町にありました。午後八時ごろでしたかね。(当時はサマータイムを採用していましたから、実際は一時間早くなっていて、今の九時ごろです。)露地をはいったところで、兄にあいました。兄は、「大和までむかえにいったみたが、あの傾き、あのあわれな姿では生きていとは思わなんだ」と、抱きついて泣きました。観音町の家はかるい平屋造りでしたから、土台から一尺五寸ほどずれただけですみました。そのあと、あっちこっちの情報が聞こえてきましたが、母の死を知ったのは翌朝でした。母は、姪の嫁ぎ先へ、田植えの手伝いにいっていました。家の前が竹やぶで、いったん出たんですが、中に孫がねているのを思い出し、二人の孫を両脇にかかえて家を出た時、もうほんの少しの差でしたが、梁の下敷きになったんですね。その瞬間、孫の二人を前の方に放り出したんで、子どもたちはたすかったんです。梁の下敷きになり腰を打った拍子に、舌をかんで死んでしまいました。いちばん案じていました。震源地に近いことでしたしね。

そのあとの話ですが、頭・顔・肩はもちろん、全身打撲で三日ほどは動けないくらいでしたが、傷の手当てをしないと、夏場ですので化膿しますので、県庁(の救護所)へは翌日から毎日通いました。委員(組合)でしたし、店の方へも顔を出しました。金沢が本店でしたから、本店との連絡の仕事などございました。三国、鯖江など、

遠くからの通勤者はこれませんでしたので、市内のものはできるだけということでしたが、毎日十人ぐらいは店にきていました。だいたい、顔ぶれは揃っていましたね。あの残骸を見るたびに、胸がしめつけられる思いをしました。早くとりこわしたらとも思いましたが、とりこわされる時にはまたひと泣きしました。私はそのあと、金沢の本社へ転勤になり、八月から十月まで二ヵ月勤務しましたが、その間にとりこわされたと記憶しています。それからあと、片町に仮営業所ができ、そこへ出ましたが、あまり経営もよくなく、ほんのしばらくして福井店は解散ということになりました。私も、それを機会に、年ごろでもございましたし、退職しました。昭和十三年三月に入店したころは福屋とっておりましたが、昭和十六年に合併して、大和百貨店と改称しました。そのころいちじ退職していましたが、戦後昭和二十一年、再度おすすりを受け、再入店という形で勤めていました。指のケガの方は、そうとう長い間かかりました。相当に鉄の棒にくいこみましたのでね。骨そのものが曲がってしまったんですね。指をみるたびごとに、そのときのことを思い出します。

『ゆきのした、227号、1978』より

[註記]

上記の体験談は、福井市在住の櫻川幸夫氏(株式会社アーサ代表取締役、福井県建築士事務所協会会長:当時)から偶然にもご提供戴いたものである。